
神様の花嫁

ROM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の花嫁

【Nコード】

N4689Y

【作者名】

ROM

【あらすじ】

世界で最も美しい乙女達——の、付き医者としてなぜか王城に滞在する羽目になったリーザ。

舞踏会がおわったら今まで通りの生活に、と思っていたら。

容姿の美しさと地位を自覚し利用することを知っている女性と、そんな彼女にどうしても惹かれてしまうその他の話。

おとぎ話

昔々

グイヴァルディアとよばれるこの世界は
魔が支配していました。

人々は魔に従属し

絶望と共に生きていました。

そんな日々を過ごす中にも、
人々には希望がありました。

それは一人の少年でした。

彼は魔に屈したりなどしません。

涙する人々を慰め力になり、支えとなりました。

彼がいると、人は笑顔を取り戻すことができました。

そんなある日、

少年は一人の少女をかばって魔族の怒りを買いました。

拷問を受け、殺されかけながら、彼はただ願います。

どうか、人々に救いを――

そのとき、彼の目の前に世にも美しい一人の青年が現れました。
その青年は光に包まれていました。

青年は言います。

勇敢な少年よ

私の願いを叶えるならば
お前の望みをかなえよう

少年は応えました。

私にできることなら何でもしましょう

すると青年が天に向けて光の珠を放ちました。
珠は天高く上昇し、月とური二つに見えました。

そのとき、天から眩いほどの光が地上に降り注ぎました。
人々が目を開けたとき、魔のほとんどが消え失せてしまいました。

驚く少年に青年は告げました。

二つの月が重なるとき、我に花嫁を捧げよ
世界で最も美しい乙女を

そして青年は消えました。

少年はその言葉をしっかりと胸に刻み、
そのいつか来る約束の日に備えることを誓いました。

その少年こそバルディ・レイゾン。
レイゾン国の初代国王となるのです。

舞踏会のお知らせ（前書き）

主人公決して純粹じゃないです。

地位なんて関係ない、私綺麗なんかじゃない…なんていう少女じゃありません。

そういう主人公が苦手な方はご容赦ください。

舞踏会のお知らせ

少し端の破れた羊皮紙。

【容姿のすぐれた乙女はすべてレイゾン国創立記念日の舞踏会出席登録を義務づける。】

「……………で？」

私は思いつきり眉をしかめたまま目の前の男を睨みつけた。
わざわざ村の広間から剥がしてきたらしい男には悪いが、ヴィヴアルディア中に配布されているというこのチラシは何度も見ている。
そしてなにが言いたいのかわからない。

「で、って？」

「だから、なにが言いたいの？」

忙しいんだから、と言いながら私は靴墨を眉に塗ろうとチラシを男に突き返した。

今日は街の花街に往診に行くことになっている。

診療所のあるこの村からは少し遠いので、早めに行かなければ営業の始まる夜になってしまう。

めずらしく興奮して見る見ろというから何かと思えば、1月前のチラシとは。

まあこいつがくるのも一月ぶりなんだけど。

「私に何の関係があるのよ。」

そう言つと、さつきまで嬉しそうな顔をしていた男はみるみる内に不機嫌な顔になつて私の前に立ちふさがつた。

ちよつと。忙しいんだつてば。

「義務、つて書いてあんだろ？背いたら罰が下るぞ。」

「罰なんて下らないわよ。私は条件に当てはまらないから。」

どいて、と無理矢理押しのけて戸棚から必要な薬を取り出す。

確か避妊薬が足りなくなつて行つてた気がする。

口がすつきりする飴もいくつか必要な、と考えていると、急にぐるんと体の向きを変えられて驚いた。

目の前には燃えるような金の瞳に茶色の髪 of 美しい男。

初めて会つたときはこんな綺麗な男がいるのかと驚いたものだ。

あの出会いのあとの衝撃と慣れで、もう動じることはなくなつただけ。

「リーザ、お前美しいんだろ！？」

「いや、聞かれても。」

これを真剣な顔で言つんだから、困る。

しかも今度はぶつぶつとなぜ、だとかリーザ以上がいるものか、とか言い出しはじめる。

私は決して卑屈な人間ではない。

自分が人より美しいことは知つてゐる。

ずっとこの容姿で生きてきたのだ。

幼い頃から一目惚れは当たり前、襲われそうになつたことも、誘拐されそうになつたことも一度や二度じゃない。

実際この容姿を利用する術も知っているし、容姿の優れたということは当てはまっているだろう。

私は小さくため息をついてそっちなじゃないわよ、と呟いた。

「乙女じゃないって言ってんの。」

小さく言っただのにその言葉は男に大きな衝撃だったらしく、びくりと大きく肩を震わせた。

「……………あ？お前、どこのどいつにやられた。」

そいつぶつ殺す、と本気で殺気立つこの男。

私はもう呆れを通り越して頭が痛くなる。

本気なのか、冗談なのか。

いや、家が震えるほどのこの殺気は本気なのだろう。

止めて欲しい。

もうだいたい古いから屋根が落ちてきそうだ。

「……………ウィル、あんたでしょ。」

人の乙女を奪っておいて、忘れたのかこの男は。

ウィルは訳がわからない、とても言いたげに眉をしかめていたが、だんだん私の言う意味を理解し始めたのか殺気が収まり、安堵するようなところけるような笑みに変わり始めた。

そう、普通の女なら腰砕けになりそうな。

無駄なフェロモン。

むかつく。

「ああ、お前、俺以外知らないのか。」

本当に嬉しそうに眉を下げて笑うウィルに痛いほど抱きしめられ、私はしばしと容赦なくこいつの背中を叩いた。

開き直りやがった、この男。

初めて会った夜私に襲いかかったのを忘れてたくせに。

「離しなさい、バカ。時間無いつて言ってるでしょ。」

結構強めで叩いたのに、堪えた風もなくウィルは私を離さないまま上機嫌で、戸棚からの上段から飴を取り出し渡してくれた。

確かに踏み台無しの私じゃ身長足りなかっただろう。

私も165センチはあるが、ウィルは20センチ以上私より高い。くそう、なんで欲しい物がわかるんだろう。

「俺だけなら大丈夫だ。舞踏会行け。」

「何言ってるんだか、大丈夫なわけないでしょ。」

どこまで傲慢なのよ。

最後までいってないなんて言うのはあり得ない。

というか、一晩中この男は私を寝かさなかったのだ。

奪われたあの次の朝、下半身の違和感を感じながら何を言われても無視する私に、ウィルは一週間毎日訪れてきた。

折れて私が許可し無い限り二度と触れないことを約束させ、私はウィルを許したのだ。

それからこんな山奥の村に一週間ごとにウィルは私を訪れ、何かを持ってきたり話をし抱きしめることもあるが、それ以上触れない。たまに一月空けることはあるが、そういうときは前もって言うというマメさ。

そう言う経緯があつて、もう行為自体を恨む気持ちはないけれど。

忘れるってどういうことよ。

それに、一度だけでも乙女でないのは確かなら、それで舞踏会に行く方が処罰されるっての。

もがいても離してくれないので諦め、体の向きを反転させて後ろ向きに抱きしめられたままでずると引きずるように歩く。

慣れているのか、なぜか私はほとんど体重を感じない。

女たらしめ。

大丈夫だって、行けって、と繰り返すウィルを無視しながら、医療具をまとめたバッグを持ったまま泥とファンデーションを混ぜたものを顔に塗りつける。

それから調合しておいた魔法入りの薬を飲んで、金髪を茶色の髪に変化させた。

これでほとんどの準備はできた。

あとはこの大きな子供を引き離さなければ。

こんな綺麗な男を花街に連れて行くなんで、いろいろな意味で危険すぎる。

何が言いたいの

「あのねー、もう、邪魔ってば。」

「なあ、俺が連れてってやるから王城行けよ。ドレスだつて準備するし、患者の相手は俺が代わる。」

「むりだつてば。」

わざとらしく大きくため息をつく、ウィルが私を抱く腕に力をこめたのが分かった。

こら、きわどいとこ触ってるの気づいてる？

「大体ね、なんでそんなに薦めるの？」

「舞踏会だぞ？普通の女なら夢見るものなんだろう。」

「そうかもね。だから？」

「行けたら幸せだろ？」

でたよ、口癖。

ぽんぽん、とウィルの腕を叩いて微かに力が弱まったところで、もう一度体の向きを変えて正面に向き直る。

ウィルは微かに不安そうに私を見下ろしていた。

会ったときからのウィルの口癖。

お前を幸せにしたい。

まるでプロポーズみたいだと思うけど、初めてあったときにそう言っただけでそのまま押し倒すのはどうなんだ、と思う。

あれからことあるごとに私を喜ばせようとはしてくれただけで、絶対どこかずれてる。

魚が食べたいと呟いたら私より大きな緑色の魚を持ってきたり、

薬草が足りないため息をついたら希少なはずの薬草をかご一杯に摘んできた。料理作って、といったときはキッチンを黒こげにしたいけど、その次の月に来たとき完璧なフルコースを作ってくれた。たぶんどこかの貴族なんだろう。

そして、私を幸せにしたいというのは本心なんだろう。なぜだか知らないけど。

私はふつと笑ってウィルの頬に手を当てた。ウィルはちよつと目を瞠ったが、そのまま私を見つめている。

「舞踏会に憧れたこともあったけど、今はそうでもないのよ。綺麗なドレスよりも白衣の方が好きだし、ダンスの仕方も知らないわ。」

純潔を奪ったことを万が一にも罪悪感を感じてるかと思い、安心させるために言ったので、私の言葉に対するウィルの表情には少し驚いた。

キッチンを黒こげにしたときの顔してる。ばつが悪そうで、不安なのを押し殺した顔。どうして？

本当に舞踏会への夢なんてもう持っていないのよ？

「舞踏会に行きたくないのか？」

「そうよ。」

「舞踏会がないのなら行くのか？」

は？

まじまじと顔を見つめても、ウィルの顔は真剣そのもの。いやいやいや。

「舞踏会がないなら王都に行くかって？」

「そう、行くか？」

「いや、そもそも行く必要がないじゃない？」

私は村と近くの街で医者をしているだけで、王都には王都の医者がある。

何をしに行けっというの？

ウィルはなんともいえない悲痛な顔をしたままだ。

私にはたぶん顔中にはてなが浮かんでいる。

ウィルが頬に添えたまま固まっていた私の手をぎゅっと握りしめてきた。

私よりずっと大きく、骨張っていて、冷たい手。

「リーザは、……神の花嫁になるのが嫌なのか？」

低く、心地よく響く声。

言われた瞬間は、何の話か分からなかった。

かみ？

………神？

たっぷり10秒考えて、やっとあの童話を思い出した。

そういえば、もうすぐ月がふたつ重なるって誰かが言っていた気がする。

ヴィヴァルディアに生を受けた物なら、特にレイゾーン国に生まれた者なら多分誰でも知っているあのお話し。

数千年前交わされた、世界一美しい乙女を神に差し出すという約束。

ウィルはあのおとき話をこの勅命と結びつけたのだろう。

こんなに傲慢で俺様なくせに、そういうの信じてるの？

なんだか甘酸っぱい気持ちになって、私は捕まれてない方の手で思いつきりウィルの額にデコピンしてやろうとして、寸前で止められた。

眉を微かに寄せて見下ろすウィルの目に、化粧を終えた私の冴えない姿が映っている。

この男、本気で私が世界一美しいと思ってるのだろうか。
王都に行くことが本当に私の幸せになると？

「あのね、私が生まれてからも2回月は重なったと言われているの。数千年の間、同じように何百回と重なったはず。そのどの時も王城に美しい乙女が集められたと聞くけど、神様が現れたとは聞かないでしょう。」

ウィルは医術や魔術など専門知識は不思議なくらい知ってるくせに、世情のことはほとんど知らないのだろう。専門の医術の知識でさえ情けないことに負けても、私にも教えられることがあると思うとなんとなく嬉しい。

「そしてそのどの時にも、その中から王子が結婚相手を選んだらしいの。だから、これもきつと王子様の花嫁捜しなのよ。伝承を利用した、王族の伝統。」

ウィルは黙ったままだが、少しだけ私を握りしめる手が強くなった気がする。

ここまで言ったら乙女じゃない女が舞踏会にいく危険性を分かってくれたんだろう。

「だから、私は」

「それでも、リーザは行かねば駄目だ。」

はあ!?

文句を言おうとして、固まる。

ゴールドの瞳が、いつもよりずっと熱っぽく私を見つめている。

どうしてそんな目で見るの?

それなのに、私に舞踏会に行つて欲しいの?

なんとなくこれ以上見ていられなくて、私はウィルから目をそらした。

「大体、もう登録期限は過ぎてるのよ。舞踏会に行けるのは、登録後の前面接で合格した女の子だけ。5日前に期限は過ぎたわ。」

ほとんどはそこで落とされるという。

舞踏会に行けるのはほんの一握り。

たぶん田舎娘の私なんか応募したところで合格はもらえなかっただろう。

街の男達に荷物を持たせるときに使う媚は面接官の役になど立たない。

花街で教わった技は別だけれど。

あれらをつかったら、もしかしたら受かっていたかもしれない。

普通の女の子は知らないだろう技々を、診療先の一流芸妓達が私に教えてくれたのだ。

一流の後宮娼婦達でさえ一部しか知らないという秘技も診療代代わりに教えてくれた。

知識としてしか知らないが、それをつかって王子を籠絡、という

のは楽しそうとちらりと思ったのは秘密だ。

腕の中から無理矢理出ると、ウィルはじつと眉を寄せて何かを考えているようだった。

それを見ながら何枚も着込みその上から白衣を羽織る。

けれど私は乙女ではないし、一般の女の子達よりずっと性に対して耐性ができてしまった。

麗しいご令嬢として頬を染めるなんてできない。

ウィルが何を言っても、舞踏会には行かない、行けない。

「今は医者してるのが楽しいの。王子様の花嫁なんて興味ないわ。」
そう言い残して、私は家を出た。

「医者、か。」

ウィルが低い声でそう呟いたのなんて、無視して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4689y/>

神様の花嫁

2011年11月13日17時23分発行